

## 完全寛解の10年後に再発したびまん性大細胞B細胞性リンパ腫の一例

◎広瀬 逸子<sup>1)</sup>、平尾 早希<sup>1)</sup>、伊藤 蒼<sup>1)</sup>、岡本 智裕<sup>1)</sup>  
社会医療法人峰和会 鈴鹿回生病院<sup>1)</sup>

【はじめに】びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫(DLBCL)の免疫化学療法での再発は、大半が12-18ヶ月後に起こるとされ、5年以上経ってからの再発はまれである。今回我々は完全寛解(complete remission, CR)から10年後に再発したDLBCLの一例を経験したので報告する。

【症例】70歳代女性

【現病歴】200X年9月より貧血・低ALB血症を認めていた。翌2月体動時の息切れと・動悸・下腿浮腫・手足のしびれを自覚。徐々に増悪を認め夕方になると38℃程の発熱を認めており前医を受診。高度貧血を認め当院紹介受診となった。

【入院時検査所見】WBC12.1x10<sup>9</sup>/L、Hb4.6g/dl、PLT700x10<sup>9</sup>/L、AST15IU/L、ALT7U/L、LDH354IU/l、 $\gamma$ GTP12U/l、CRP3.90mg/dl、sIL2 6917IU/ml

【画像所見】内視鏡：盲腸部全周性に辺縁不整な潰瘍性病変あり、造影CT：骨盤部に均一な増強効果を示す腫瘤を認める。

【経過】盲腸に大きな腫瘤があり、穿孔が疑われたため緊

急手術となった。

【病理結果】回盲部19x10.5cm巨大腫瘤。大型異型リンパ球がびまん性に増生

免疫染色：CD20・79a・BCL2・MUM1(+)、C-MYC60%

【考察】DLBCLは本邦の非ホジキンリンパ腫の4割を占める、最も発生頻度が高い病型である。化学療法が主流となっており、化学療法後から5年以降に再発することはまれとされる。

【まとめ】CRから10年後に回腸病変をきたしたDLBCLの一例を経験した。長時間経っていても再発の可能性を念頭におく必要があると認識すべきである。

連絡先：059-375-1312